能楽師大西家年譜考証

関　屋　俊　彦

A Chronological Account of the Ōnishi Affiliated with the Head of the Kanze School of Noh

SEKIYA　Toshihiko

In 1762, Ōnishi Shin'emon (1743–1822) left his hometown, Himeji in Hyōgo, to become a professional Noh performer in Osaka. He became the first Noh master of the Ōnishi after studying under the guidance of the Iwai, one of the five celebrated Noh families (named Kyōkanzegokenya) of Noh chanting. Ōnishi Shinjirō (1767–1812), succeeding his uncle Shin'emon, became the second Noh master of the Ōnishi. One of his disciples, Yazaburō (dates unknown) was named the third head Noh performer of the Ōnishi shortly after Shinjirō's untimely death. The fourth Noh master of the Ōnishi was a son of the Kawachi, Sunshō (1810–1883). As a professional Noh family, the Ōnishi flourished under Sunshō's leadership, for which he received the honorary pseudonym Kyosetsu from the head of the Kanze School of Noh at the age of at least 27. His second son, Shinzō (1840–1916), succeeded him and became the fifth Noh master of the Ōnishi. Shinzō was trained by the head of the Kanze School of Noh and allegedly mastered all 200 Kanze school Noh pieces by the age of 15. Despite his accomplishments as a Noh performer, Shinzō went through financial hardships until 1900 when he received the honorary pseudonym Kansetsu and obtained a Noh theater in Umeda, Osaka. In 1906, Osaka's first Noh journal, *Kokufū*, was published as part of Kansetsu's efforts to promote Noh theater. With the financial support of the affluent Sumitomo family, Kansetsu's nephew Tezuka Ryōtarō (1866–1931) established the largest Noh theater in Japan in 1919. As a result of the achievements of these men, Osaka became known as a center of Noh. Kansetsu's son-in-law Shinzaburō (1877–1934) became the sixth Noh master of the Ōnishi, followed by his son Nobuhisa (1903–1983), the seventh Noh

master, who succeeded in mastering all Kanze school Noh pieces by the age of 76. The eighth Noh master, Tomohisa (born in 1938), is the current head of the Ōnishi.

キーワード： 能楽師（Professional Noh family）、大西家（Ōnishi family）、年譜（Chronogical Account）、大西閑雪（Ōnishi Kansetsu）、『國諷』（Noh journal Kokufū）

はじめに

本稿は令和２年２月15日、児島惟謙館での日本言語文化学研究班（代表：村田右富実氏）2019年度東西学術研究所第17回研究例会の一員として標記と同じ題で報告したものに基づいている。すなわち大西家七世信久『初舞台七十年』（昭和54年・大西松諷社）の記述を確認しながら付け加えていった。パワーポイントの写真50枚で紹介。特に孝徳帝を唯一祀っている謡曲〈豊崎宮〉は信久が戦時中俳人入江来布に作詞を依頼した曲であるが、会場には来布と親しかった箕面西光寺名誉住職吉田叡隆氏と来布研究者角野京子氏がお見えであった。実は来布の息・伸は関大哲学科の出身で入江塾創立者。次に架蔵した大西閑雪筆掛軸「謡曲十五徳」の捺印「心外無別法」は甲骨文で禅宗用語であるが実は謡曲〈柏崎〉を出典としていることを加えた。更に閑雪の〈関寺小町〉は『國諷』に記載されていることを指摘した。『國諷』は明治39年に創刊された大阪で唯一の能楽専門雑誌で閑雪主導と思われる貴重な雑誌である。大正15年に手塚（大西）亮太郎が高野山に建立した記念碑の現状も示した。

1　新聞記事と年譜考証

能楽師「大西家は一七六二年（宝暦一二）に姫路より大阪へ出て京観世五軒家の岩井家に学んだ新右衛門宗明を初代とし、以後同地にあって謡指南をしていた家柄」（小林責ほか編『能楽大事典』・2012年・筑摩書房）である。京五軒家とは京観世五軒家のことで18世紀半ばころシテ方片山九郎衛門家のもとに岩井・井上・林・浅野・薗の五家が地謡方をつとめ、江戸の観世宗家と異なった謡方で素謡教授などで生計を立てていた。大阪博物場・大阪能楽殿と移り、信久氏の代になって大阪能楽会館はその拠点であった。しかしながら平成29年に残念ながら閉館した。私は大西家八世智久氏の御厚意で目下、同家所蔵の蔵書解題目録を作成中であり、令和３年５月を目途に科研費の成果報告をインターネット配信する予定である。従って今回も例会発表では使わなかった新聞記事を中心とした、やはり中間報告となることをお断りしたい。

関西大学に赴任した時、『先生の横顔』の私の欄に「年譜考証という実証学の成果を見事に示し」と書いてあった。恐らく神堀忍先生が書いてくださったと思われるが、なるほどと思い気

に入って以来、毎年そこだけ残して書き継いできた。予備校で国文学という道に進むことを勧めてくださった米倉利昭先生からは「文学少女」とあだ名されていたので、本来なら美文好みに陥っていたのかも知れない。しかし、伊藤正義先生にパズルを解くような文献学の面白さを徹底的に叩き込まれた。一方で谷澤永一先生に名著とはなんですかと臆面もなく問うた時、即座に「残るものだよ」と答えられた。下手に書いても将来残るのは文献である。大都会のエリートたちに伍するには文献を主軸にした年譜考証を武器にしようと決心した瞬間であった。

今回、はからずも新聞記事を多く取り入れている。すなわち倉田喜弘氏編著『明治の能楽』（一）（平成６年３月・日本芸術文化振興会）～（四）と『大正の能楽』（平成10年３月）を大いに活用している。正直いって古典を扱っている者として新聞記事は今まであまり参考にしてこなかった。古典研究者の中には一切新聞は読まないという方もいる。紅旗征戎非吾事の精神である。しかし、読み進めるうち倉田氏の仕事が実に労作であるということがわかった。原稿は表章氏が目を通されたともいう。特に戦前のものはいわゆるフェイクニュースが多かろうとの思い込みは吹き飛んだ。作品研究はその時代に置いて考えなさいとは中村幸彦先生の言。「当時の世界を知れ」とは伊藤正義先生の言。新聞には今、どの演者が注目されているか、どのようなゴタゴタがあるかまで記してくれている。ルーツ探しは永遠の課題でもあるが、とかくわが家のことを自分で調べると思い入れが激しくて偏った見方になり勝ちである。能役者が自分のことばで発言するようになったのは一昔前の体験者からいわせると大変結構で、ありがたい時代になってきた。しかし、私の家は600年の歴史がありますなどと述べる。果たしてそうか？調べてみると一旦断絶のため大抵養子で入っていて、なんとか家名を守ろうとしている事情がわからないでいる。やはり、客観視できる第三者に任せるのがよい。更に改めて読んでみて、戦前の新聞の方が一般読者への啓蒙に力を入れていることにも気付いた。三面記事的なものもあるが解説が丁寧なのである。今の新聞は、たとえば大阪能楽会館が閉館してもほんの数行しか書いてくれなかったではないか。

以下、倉田氏の労に拠るところが多いが作成した年譜の年月日は新聞の発行日ではなく記載中の予定日である。実際の演能は当日、変更もあり得たことはお断りしたい。

2　大西家歴代略述

以下に作成した年譜を読み解くにあたって大西信久『初舞台七十年』の記述と倉田氏の新聞記事を中心に大西家歴代とかかわる主要人物の生没年と特記すべき事項を略記（＊として記す）して目安とした。大西家の系図については『初舞台七十年』に「大西家々系」が載せられているが、ここでは省略した。未確認箇所は？で記した。いずれ大西家文書から確認したい。なお、

能楽師の襲名を含めた改名は煩雑なので、年譜に於て大西家は〈初世〉新右衛門から〈八世〉智久とし、手塚（大西）亮太郎（自称「公雪」）は〈亮太郎〉とした。そのほか主要な人物も〈　〉に入れ、敬称は略した。曲名の表記等は『能楽大事典』に従っている。

〈初世〉＝新右衛門・宗明・教阿・寛保３年（1743）～文政５年（1822）。

〈二世〉＝新二郎・恒貞・文化７年（1810）生。

〈三世〉＝弥三郎・了達

〈四世〉＝寸松・喜三郎・新右衛門・虚雪

〈五世〉＝閑雪・新蔵・新右衛門・鑑一郎・信胄・天保11年（1840）～大正５年（1916）。

七十歳の時と〈安宅〉の写真が『初舞台七十年』に載っている。

〈亮太郎〉＝大西亮太郎のちに手塚姓・公雪・慶応２年（1866）～昭和６年（1931）。閑雪甥。日本一といわれた大阪能楽殿建築。『現代音楽大観』（昭和２年11月25日・日本名鑑協会・非売品）に写真入りで紹介。国内研修の時、神田古書市で見付け、法政大能研の棚に置いてもらったらそのうち復刻がなされた思い出深い一冊。亮太郎に関しては2013年３月30日に関西大学千里山キャンパスで開催された第20回能楽フォーラム「大阪能楽殿と大西亮太郎」の年譜を使い主要なものにとどめた。又、子息の貞三については省略した。

〈生田秀〉＝安政４年（1857）～明治39年（1906）。現在のアサヒビール入社。閑雪に習う。拙著『続狂言史の基礎的研究』（2015年３月・関西大学出版部）・科研費報告書『新蔵生田文庫蔵書目録并解題』（2009年６月・遊文舎）参考。

〈六世〉＝新三郎・信正・弁治郎・明治10年（1877）生。大藪久兵衛三男。『現代音楽大観』に写真入りで紹介。

〈七世〉＝信久・明治36年（1903）～昭和58年（1983）。今回は省略したが、ご自身で「略年譜」「大曲・秘曲　演能記録」を記録していらっしゃるので参照されたい。

〈信彦〉＝大西信彦・大正２年（1913）～昭和60年（1985）。信久弟。

〈八世〉＝智久・昭和13年（1938）～。長男礼久。

3　年譜考証

［凡例］

一、演能は個人に絞った主要なものとし、全体の能組はほとんど省略した。

一、年齢は数え年のままとした。曲名は〈　〉で統一した。

一、出典の略記号は次の通りである。

A ＝大西信久『初舞台七十年』

B＝倉田喜弘『明治・大正の能楽』・平成６年（1994）～10年・日本芸術文化振興会
〔事典〕＝小林責ほか編『能楽大事典』平成24年（2012）・筑摩書房
〔能楽〕＝『能楽』・明治35年（1902）創刊・能楽館
〔三善〕＝三善貞司『大阪人物辞典』・平成12年（2000）11月・清文堂
〔國諷〕＝『國諷』・明治39年（1906）７月～大正15年（1926）６月・大阪國諷会
〔生田〕＝拙著『新蔵生田文庫蔵書目録并解題』
〔大観〕＝『現代音楽大観』・昭和２年（1927）・日本名鑑協会
〔フォ〕＝第20回能楽フォーラム「大阪能楽殿と大西亮太郎」（2013年３月30日）

【年譜】

宝暦12年（1762）〈初世〉前名・佐和新十郎光次・播磨国姫路本町住の古手屋四郎右衛門次男。記録には「本ト佐久和氏、大西ハ母方ノ氏ナリ、謡業ノ始祖也」とある。A
？　〈初世〉京観世五軒家岩井家の門に学ぶ。A
寛政４年（1792）５月〈初世〉難波橋北詰に住居。A
？　〈初世〉大火に遭い、北浜中橋西南角に移る。A
？　〈初世〉浪華へ出て謡の指南を業とする。A
寛政11年（1799）２月〈初世〉剃髪して教阿と名乗る。A
天明１年（1781）９月〈二世〉岩井家へ入門、修業。A
天明７年（1787）〈二世〉新二郎と改名。舟町加島屋小路に居住、謡指南を始める。A
天明９＝寛政１年（1789）２月、初世二世父子共演で改名祝会。A
文化４年（1807）〈二世〉逝去（41歳）。〈三世〉弟子弥三郎継承。A
文化７年（1810）〈四世〉寸松生誕。父氏浦宇兵衛。幼名喜三郎。A
文政２年（1819）〈初世〉妙住尼が世話をする。実子なく存命中に養子〈四世〉。A
文政５年（1822）５月17日〈初世〉逝去（80歳）。A
文政７年（1824）〈四世〉新右衛門襲名。岩井家で修業。A
？　〈四世〉藤沢七兵衛の女ヨネ（後チサ）と結婚。二男三女。長男金松早世。長女キク手塚氏・次女コト谷五兵衛・三女コウ中村元三郎に嫁す。A
文政８年（1825）岩井家六世七郎右衛門直忠逝去。七世を七郎右衛門信発とする。隠居中の五世七郎右衛門信精が代わって〈四世〉に稽古。A
文政10年（1827）４月５日〈四世〉禁裏能地謡方として初舞台。A
文政11年（1828）〈四世〉東本願寺能に出演。「御用控方」写真史料掲載。A

文政13＝天保１年（1830）岩井七郎右衛門信精逝去。〈四世〉岩井新発に尽くす。A

天保８年（1837）〈四世〉岩井家を辞し、浪華に戻り斉藤町に住む。寸松と号す。A

薪炭商を営む。〔三善〕

？　〈四世〉観世宗家から雪号許され、虚雪と号す。A

天保11年（1840）12月12日〈五世〉寸松次男として生まれる。A

嘉永１年（1848）〈五世〉堺筋今橋に住む。A

安政１年（1854）〈五世〉江戸に出て観世宗家22世清孝に師事し、15歳にして観世流全曲修得。A

安政２年（1855）〈五世〉北浜井池（緒方塾の向側）に住む。謡を岩井七郎右衛門、立方は片山九郎右衛門、笛は森田流、小鼓は大倉流小松原伝四郎、大鼓は谷又右衛門、太鼓は橋本市左衛門に師事。初役として、京都御所の能で〈望月〉の子方を勤める。A

安政３年（1856）〈生田秀〉生誕。〔生田〕

万延１年（1860）〈五世〉家督相続し、新右衛門となる。のち、弟子に白雪醸造元の小西新右衛門がいたため、鑑一郎と名乗る。一男四女。二・三女早世。長女信市川氏に嫁ぐ。四女カメに婿養子〈六世〉。A

文久１年（1861）京都桂御殿にて、和宮様御婚儀祝賀能に奉仕。この頃、有栖川宮家、村雲尼公、東西両本願寺などにて、たびたび演能。A

文久２年（1862）岩井信発逝去（46歳）後継者・養子なく岩井家無住となる。〈四世〉が名代をつとめる。A

慶応２年（1866）12月16日〈亮太郎〉誕生。父は手塚善蔵。母は〈四世〉の長女静子。２歳の時、母が実家に戻り養育される。〔フォ〕

維新前後（1862～71）　世情騒然のため〈五世〉私塾を開き、書道・英語等を教える。一時、写真業もA。過書町（現・中央区北浜三丁目）で写真屋（中略）営業不振で、薩摩堀の広教寺で手習いの師匠」〔三善〕

慶応４年（1868）３月＝明治１年〈四世〉等観世名代として今出川観世屋敷を管理している由、京都裁判所に届け書提出。

明治２年７月７日、観世清孝初来京の節、大西を無視。明治36年８月２日、茂山忠三郎談。B「大西」初出。

明治３年（1870）〈亮太郎〉観世清孝の直弟子となる。〔フォ〕

明治５年（1872）〈五世〉小学校訓導を拝命。約10年間従事。A

明治６年（1873）〈亮太郎〉〈経政〉初シテ・小松原舞台〔フォ〕

明治９年（1876）〈五世〉明治天皇が大阪行幸され、奉迎場に当てられた臨時舞台で亮太郎の子

方で〈橋弁慶〉を演じ、褒められるも舞台が変わっているとの感想に発奮。〔三善〕

11月18日〈五世〉〈亮太郎〉難波新地滝の栄にて仕舞。B

明治10年（1877）2月6日〈五世〉大阪鉄道開業式で〈橋弁慶〉B。〔フォ〕には明治9年〈亮太郎〉〈橋弁慶〉・大阪梅田駅落成式とする。

明治11年（1878）5月5日〈五世〉生玉神社催主B

11月3日〈五世〉〈海人〉天長節・生玉神社B

11月23日〈五世〉高村太左衛門の会・博物場B

明治12年（1879）4月13日〈五世〉〈船弁慶〉・〈亮太郎〉〈翁〉橋岡舞台B

明治13年（1880）10月3日〈五世〉〈鵜飼〉・橋岡舞台B

24日〈五世〉高木半新作〈鶴ケ岡〉・橋岡舞台B

明治14年（1881）3月13日〈五世〉〈養老〉・平野町神宮教会所・岩崎長世追善B

27日〈五世〉・伊丹小西新右衛門能舞台披きB

6月19日〈五世〉〈小督〉〈鞍馬天狗〉・橋岡舞台B

7月7日〈五世〉〈小鍛冶〉・西宮神社正遷宮B

12月4日〈五世〉〈鞍馬天狗〉・金春広成催主・橋岡舞台B

明治15年（1882）3月25日〈五世〉〈国栖〉・旭翁居士追善・中村弥三郎催・橋岡舞台B

4月5日〈五世〉〈山姥〉・森田柵内追善・操催主・橋岡舞台B

〈五世〉東京芝紅葉館にて、皇后、皇太后両陛下台覧の能に出勤奉仕。B

6月18日〈五世〉〈大会〉・今井幾三郎催主・橋岡舞台B

9月30日〈五世〉〈邯鄲〉・橋岡舞台B

10月8日〈五世〉〈飛雲〉・橋岡舞台B

明治16年（1883）2月〈亮太郎〉実父善蔵没し、手塚姓を継ぐ。

＊但し、新聞記事ではその後も大西姓で記載。

5月13日〈五世〉〈望月〉・〈亮太郎〉〈是界〉・橋岡舞台B

6月3日〈五世〉〈安宅〉・枚岡神社能舞台落成記念B

7月14日〈五世〉〈安宅〉・橋岡舞台・観世清孝来阪B

7月15日〈亮太郎〉〈清経〉・橋岡舞台・観世清孝来阪B

＊観世清孝の来阪説得により東京観世舎の下に京都観世舎（含片山・春藤）を置き、大阪を京都の分局とし、橋岡・大西・生一が順番に幹事となることを決定。B

9月23日〈五世〉〈船弁慶〉・〈亮太郎〉〈猩々〉・橋岡舞台B

11月4日〈五世〉〈誓願寺〉・〈亮太郎〉〈熊坂〉・橋岡舞台B

同年　〈四世〉逝去。妻剃髪し妙喜尼と称す。A

明治17年（1884）〈亮太郎〉大西分家となる。〔フォ〕

5月17日〈五世〉〈道成寺〉〈烏帽子折〉・〈亮太郎〉〈夜討曽我〉B

明治18年（1885）5月17日〈五世〉〈唐船〉・〈亮太郎〉〈碇潜〉B

11月6日〈亮太郎〉11月1日の浅草梅若六郎宅で観世銕之丞催主しに大西良太郎名で出演。『今日新聞』に「孰れも評するまでもなく、大西、橋岡の両個は今度初めての出京」とあるB。宗家塾生〔フォ〕

11月14日〈五世〉〈百万〉〈善界〉B

明治19年（1886）2月14日〈五世〉〈石橋〉「京都観世舎に於て、大坂北浜の大西鑑一郎が亡父追善のため催主ふす」B

3月28日〈五世〉〈東岸居士〉橋岡舞台B

10月3日〈五世〉〈山姥〉橋岡舞台B

10月20日、コレラ流行中、大坂博物場の能は鮨詰め状態。相撲は中止、演説会は人数制限しているのに黙認している。

＊今のコロナウィルス騒動を連想する。当時、いかに大阪人が能好きであったかが伺える。B

明治20年（1887）2月6日〈五世〉博物場で高村太左衛門･生一左兵衛等と共に天覧能下稽古B

2月15日〈亮太郎〉〈橋弁慶〉・天覧能・大阪偕行社〔フォ〕

3月27日〈五世〉〈小袖曽我〉中之島翠柳館・金剛・観世の和解能B

9月18日〈五世〉〈張良〉翠柳館

＊〈石橋〉紀陽獅子についてB

〈五世〉天皇、皇后両陛下、大阪偕行社へ行幸啓の時、御前能仕舞〈橋弁慶〉B

〈生田秀〉大阪麦酒会社創立に参与。ドイツに派遣される。〔生田〕

明治21年（1888）3月10日〈五世〉〈船弁慶〉柳馬場片山観世舎B

11日〈五世〉〈山姥〉片山観世舎B

5月6日〈亮太郎〉〈舎利〉浅草梅若六郎宅B

10月7日〈五世〉〈安宅〉翠柳館B

明治22年（1889）2月3日〈五世〉座主〈板敷山〉〈鞍馬天狗〉片山観世舎B

5月22日〈五世〉〈隅田川〉・〈亮太郎〉〈望月〉今宮商業倶楽部・孤児院義援B

6月8・9日〈五世〉寸松追善能・橋岡舞台B

16日〈五世〉〈大江山〉片山豊延追善能・京都観世舎B

9月22日〈五世〉〈融〉橋岡舞台B

10月13日〈五世〉〈船弁慶〉翠柳館・野村又三郎〈狸腹鼓〉先代追善Ｂ

10月17日〈五世〉〈絵馬〉京都観世舎改築記念Ｂ

18日〈五世〉〈葛城〉京都観世舎改築記念Ｂ

11月10日〈五世〉〈俊寛〉京都観世舎・寸松追善能Ｂ

17日〈五世〉〈歌占〉京都観世舎・佐藤友作十三回忌能Ｂ

23日〈五世〉〈巻絹〉橋岡舞台・村松融三職分披露能Ｂ

12月８日〈五世〉〈羽衣〉今宮商業倶楽部御殿舞台落成記念能Ｂ

？　〈五世〉〈橋弁慶〉・天覧能・偕行社〔三善〕

明治23年（1890）〈五世〉10年余り京都に在住。片山氏と共に本願寺能に出演。Ａ

４月10日〈五世〉山階宮旅館で天覧能。〈小鍛冶〉予定なるも変更。Ｂ

５月11日〈五世〉〈邯鄲〉中之島翠柳館・野口勘三郎催主し。Ｂ

11月３日〈五世〉〈殺生石〉京都観世舎・天長節祝賀。Ｂ

９日〈五世〉〈半蔀〉京都観世舎・京都片山舞台改築記念。Ｂ

明治24年（1891）１月26日〈五世〉〈芦刈〉京都観世舎Ｂ

３月24日〈五世〉〈弱法師〉・大阪今宮商業倶楽部Ｂ

３月29日〈五世〉〈鞍馬天狗〉・安森蚊六古稀祝・京都観世舎Ｂ

４月12日〈五世〉〈鉢木〉・京都淀御旅所Ｂ

５月、英照皇太后陛下西本願寺行啓能。〈四世〉〈五世〉〈亮太郎〉演能。（『大観』）〈生田秀〉吹田麦酒工場創設。〔生田〕

９月19日〈五世〉〈弓八幡〉・京都観世舎・茂山千五郎会Ｂ

10月24日〈亮太郎〉〈道成寺〉・京都西本願寺・皇太子行啓Ｂ

明治25年（1892）３月６日〈亮太郎〉〈吉野天人〉復活・大阪商業倶楽部Ｂ

５月17日〈亮太郎〉〈盛久〉・淀御旅所Ｂ

６月５日〈五世〉〈俊寛〉・京都熊野神舎Ｂ

12日〈五世〉〈安達原〉・京都観世舎・浅井織之丞催主Ｂ

７月７日〈五世〉〈松虫〉・〈亮太郎〉〈雷電〉・野間亀之助催主・京都観世舎・観世清廉来京Ｂ

９月３日〈五世〉袴能〈鳥追舟〉・観世寿片山九郎右衛門名跡相続結婚披露宴・京都観世舎

10月26日〈五世〉・催主松楓社中・大阪綱島鮒卯楼Ｂ

11月12日〈五世〉〈竜田〉・京都観世舎舞台改築五周年記念Ｂ

明治26年（1893）２月18日〈五世〉〈安宅〉・東永甚五郎追善・京都観世舎Ｂ

25日〈五世〉〈鞍馬天狗〉・北野神社菜種祭Ｂ

3月5日〈五世〉催主・〈卒都婆小町〉初演・京都観世舎B

4月2日〈五世〉〈亮太郎〉〈石橋〉・ワキ方中村能成会・京都観世舎B

5月14日　催主〈亮太郎〉〈住吉詣〉・大阪商業倶楽部B

15日・大阪能楽師の権式。

＊今宮村商業倶楽部で松楓社の催しの前に俄狂言が行われたことが問題視されたが、恐らく亮太郎の案で舞台を削ることで決着した事件。この時代、能楽師は一段上の位で能舞台は神聖視されていたことが随所に散見。B

19日〈亮太郎〉〈経政〉・宝生九郎来京・京都観世舎B

9月17日〈五世〉〈淡路〉・〈亮太郎〉〈江口〉・松楓社「能楽会」設立祝・京都観世舎。

＊今も松楓社の名は継承されている。B

10月17日〈五世〉〈安宅〉・下鴨社糺能B

11月19日〈五世〉〈卒都婆小町〉〈紅葉狩〉・〈亮太郎〉〈仲光〉・松諷社・生国魂神社B

11月23日〈五世〉〈望月〉笛方平岩改名披露・京都観世舎B

明治27年（1894）3月15日〈亮太郎〉〈春栄〉・京都能楽舎B

5月6日〈五世〉素囃子〈杜若〉・〈亮太郎〉〈田村〉・〈五世・亮太郎〉〈石橋〉・養子披露・京都能楽堂（京都能楽舎改名）B

5月13日〈五世〉〈望月〉・〈亮太郎〉〈海人〉・野村又三郎追善・中之島洗心館B

5月25日〈五世〉仕舞〈忠度〉・〈亮太郎〉〈小袖曽我〉・松諷社主催・梅若実来阪・網島鮒卯楼B

10月17日〈五世〉〈小鍛冶〉・〈亮太郎〉〈望月〉・軍資献金能・京都能楽堂B

10月21日〈五世〉〈小鍛冶〉・〈亮太郎〉〈望月〉・軍資献金能・今井喜久治発起・茨木村別院B

11月4日〈五世〉〈正尊〉・〈亮太郎〉〈大江山〉〈石橋〉B

11月11日〈五世〉〈融〉京都今宮神社御旅所B

明治28年（1895）5月4日・舞囃子〈五世〉〈雲林院〉・〈亮太郎〉〈熊坂〉・博物場・観世清廉来阪B

5月24日〈五世〉〈国栖〉・〈亮太郎〉〈正尊〉・柳馬場能楽堂B

6月7日〈亮太郎〉〈加茂〉・凱旋祝賀会・翠柳館能舞台B

7月7日〈五世〉〈絃上〉・観世左近追善・京都能楽堂B

明治29年（1896）3月29日〈五世〉〈望月〉・観世清廉来京・京都能楽堂B

4月12日〈亮太郎〉〈橋弁慶〉・今宮商業倶楽部B

4月24日〈亮太郎〉〈蝉丸〉・高槻直清神社・催主旧藩主B

大阪博物場能楽堂取り壊し。B

6月10日〈五世〉〈安宅〉・〈亮太郎〉〈海人〉・片山能楽堂Ｂ

6月20日〈五世〉〈木賊〉・〈亮太郎〉〈葵上〉〈夜討曽我〉・大阪中之島ホテルＢ

7月18日・能楽会新設の動き・伯公爵・大和田健樹等主導。１月８日に第一回式能。

＊能楽が全国的な組織として編成された。Ｂ

7月　〈生田秀〉の提言により大阪工業学校創設→34年大阪高等工業学校（大阪大学工学部の前身）設立。秀、再びドイツに派遣される。〈五世〉〈高木半〉

＊訪欧に際しての短歌２首〔生田〕

9月27日〈五世〉〈善知鳥〉・〈亮太郎〉〈山姥〉・今宮商業倶楽部Ｂ

明治31年（1898）　4月7日〈五世〉〈巻絹〉・豊公三百年祭能・京都太閤坦Ｂ

12月４日〈五世〉〈羽衣〉・〈亮太郎〉〈船弁慶〉・大阪博物場舞台披Ｂ

〈亮太郎〉神戸に観世会〔フォ〕

明治32年（1899）　4月13日、能楽会会則〈亮太郎〉等14名委員、のち関西能楽会と改称Ｂ

5月１日〈亮太郎〉〈難波〉・〈五世〉〈盛久〉・大阪能楽会Ｂ

明治33年（1900）〈五世〉還暦。梅田に住み舞台設ける。観世清廉宗家より皆伝を許され、「閑雪」と号す。

3月４日〈五世〉〈唐船〉・〈亮太郎〉〈野守〉・野口貞次追善能・博物場Ｂ

5月２日〈五世〉〈羽衣〉・〈亮太郎〉〈猩々〉・奈良薪能再興Ｂ

３日〈亮太郎〉〈望月〉・南大門・禰宜大東の意見で若宮社前の能中止Ｂ

5月20日〈亮太郎〉〈春栄〉・〈五世〉〈鵜飼〉・博物場・大阪毎日の人気投票によるＢ

6月３日〈亮太郎〉〈杜若〉・松本金太郎来阪・博物場Ｂ

11月４日〈亮太郎〉〈乱〉・森田柵内追善能・博物場Ｂ

〈六世〉閑雪養子となる。笛を森田光次郎、大鼓を谷村市之進、小鼓を荒木賀光、太鼓を佐々木壽之助に習う。（『大観』）

？　〈生田秀〉、〈五世〉に『催華餘薫』（新既収・『優伎録』転写本）の意味を問う。〔生田〕

明治34年（1901）4月28日〈亮太郎〉〈高砂〉・川原田平助還暦祝能・博物場Ｂ

5月21日〈五世〉〈大仏供養〉・西本願寺能Ｂ

5月24日〈五世〉〈翁〉〈安宅〉・〈亮太郎〉〈道成寺〉・神戸和田神社正遷宮式能Ｂ

9月24日〈亮太郎〉〈紅葉狩〉・観世清廉宅Ｂ

12月７日〈五世〉〈神歌〉〈合浦〉・〈亮太郎〉〈東北〉・曽根崎中二丁目大西亮太郎自宅舞台披きＢ

12月８日〈五世〉〈隅田川〉・〈亮太郎〉〈望月〉・同二日目Ｂ

〈五世〉蓄音機初期のレコードに〈鶴亀〉と〈三輪〉を吹き込むA。閑雪の音源については大西秀紀氏「オリエントの謡曲SPレコード」（『謡を楽しむ文化』・平成28年10月・京都市立大学日本伝統音楽研究センター）などがある。

明治35年（1902）４月15日〈五世〉〈老松〉北野神社三光門内舞台B

〈六世〉初舞台ツレ〈老松〉シテ閑雪。（『大観』）

〈亮太郎〉ワキ方中村猪八郎や一門を引き具し、東京行き、〈張良〉〈卒都婆小町〉〈道成寺〉を舞う。

「摂津国大阪市（中略）観世流は大西派、生一派、中村派の三組あり何れも多数の門弟あれ共大西派第一の盛況ならん」（『能楽』１号）

同　９月１日　『文苑』〈鉄輪〉〈五世〉「夕闇の鞍馬の山の奥ふかみ　ほたるの影も物すごく見ゆ」（『能楽』３号）

10月19日〈亮太郎〉〈海人〉・博物場B

11月23日〈五世〉〈乱〉・〈亮太郎〉〈菊慈童〉・京都片山能楽堂舞台披きB

明治36年（1903）３月15日〈七世〉誕生A

３月29日〈亮太郎〉〈養老〉・片山九郎右衛門十三回忌B

４月16日〈亮太郎〉神戸和田神社能舞台で観阿弥五百年祭能〔フォ〕

４月19日〈五世〉〈山姥〉・〈亮太郎〉〈望月〉・茂山忠三郎十七回忌B

５月　　〈亮太郎〉宗家一行とソウルで演能。〔フォ〕

５月９日〈五世〉〈卒都婆小町〉・〈亮太郎〉〈安宅〉・10日〈道成寺〉B両人上京伝える。観世舞台B

５月24日〈五世〉〈車僧〉・大阪博覧会協賛・博物場B

25日〈五世〉〈俊寛〉・同右B

６月９日〈五世〉〈春日竜神〉・河原町京都能楽堂B

６月21日〈五世〉〈蟻通〉・〈亮太郎〉〈正尊〉・大阪博覧会協賛・博物場B

８月２日〈五世〉関西と東京の芸風の相違B

10月11日〈五世〉〈俊寛〉・同右B

11月３・４日〈五世〉〈翁〉・〈亮太郎〉〈加茂〉・生田神社神楽殿落成B

明治37年（1904）年３月20日〈五世〉〈弓八幡〉・〈亮太郎〉〈木曽〉・軍資金能・博物場B

３月27日〈亮太郎〉〈道成寺〉・献金能・片山能楽堂B

６月19日〈五世〉〈鷲〉・〈亮太郎〉〈砧〉・神戸港倶楽部・大和田建樹作〈鷲〉は明治38年５月30日付西村天囚に酷評B

２月～９月５日、日露戦争直前、〈亮太郎〉片山九郎三郎らと共に渡鮮し京釜鉄道開通式で演能。（『大観』）

10月16日〈亮太郎〉〈松風〉・茂山忠三郎の会・片山能楽堂Ｂ

11月13日〈亮太郎〉〈八島〉・片山能楽堂Ｂ

11月27日〈亮太郎〉〈乱〉・傷病兵義援能・博物場Ｂ

10月～12月24日「大西閑雪会員名簿」＝「新蔵生田文庫所蔵『大西閑雪会員名簿』について」（関大『国文学』100号・平成28年（2016）３月）

＊「閑雪は五一歳から一〇年ほど京都の烏帽子屋町に移るが、再び大阪に戻り、高麗橋五丁目に居住、同三七年には北区曽根崎中二丁目に転じ」〔三善〕

明治38年（1905）４月16日〈亮太郎〉〈自然居士〉・観阿弥五百年祭・兵庫和田神社Ｂ

４月17日・囃子方と狂言は大阪の誇り。但し、催しは大西の稽古舞台程度Ｂ

４月25日〈亮太郎〉〈百万・車之段〉・観阿弥五百年祭・博物場Ｂ

６月28日〈亮太郎〉〈望月〉・釜山南浜商業会議所倉庫・茂山千五郎渡韓談Ｂ

８月26日〈亮太郎〉〈神歌・千歳〉・唐津高取宅新築舞台Ｂ

11月４日〈亮太郎〉〈三輪〉・生田神社能楽堂Ｂ

明治39年（1906）２月18日〈五世〉〈老松〉・〈亮太郎〉〈高野物狂〉〈小鍛冶〉・博物場Ｂ

２月22日〈五世〉〈安達原〉・〈亮太郎〉〈巻絹〉・城東招魂祭場Ｂ

23日〈六世〉〈合浦〉なるも雨天中止・同右Ｂ

３月４日〈五世〉〈関寺小町〉・〈亮太郎〉〈七騎落〉〈乱〉・〈六世〉〈嵐山〉・閑雪の関寺一世一代、新三郎〈翁〉披キ。

＊拙稿「大西閑雪と〈関寺小町〉」（『武庫川国文』88号・令和２年３月20日）参考。Ｂ

３月11日〈亮太郎〉〈石橋〉・片山能楽堂Ｂ

３月26日、大日本麦酒株式会社成立。〈生田秀〉常務取締役内定。

同年同月28日〈生田秀〉逝去（52歳）。〔生田〕

４月16日〈五世〉大阪博物場舞台にて〈関寺小町〉を勤める。（『國諷』創刊号による。『能楽』39年３月号には３月４日）

６月10日、曽根崎松楓社にて生田秀の追福謡曲会。〈六世〉発声・〈五世〉追加・ほか弟子衆（『國諷』創刊号）

６月15日〈亮太郎〉〈雷電〉・茂山忠三郎二十回忌追善・博物場Ｂ

７月27日、『國諷』創刊発刊の辞掲載。Ｂ

10月13日〈亮太郎〉〈自然居士〉・片山九郎右衛門十九回忌追善・片山能楽堂Ｂ

10月17日〈亮太郎〉〈紅葉狩〉・〈五世〉松楓会主催・博物場B

12月９日〈亮太郎〉〈芦刈〉・桜間伴馬来阪・博物場・「大阪は能楽・謡曲に於ては不向きの土地」B。

＊「国民新聞」に博物場の吹きさらし・酔客に触れ、亮太郎が気の毒だとも記す。

明治40年（1907）１月13日〈五世〉〈鞍馬天狗〉・〈亮太郎〉〈翁〉・五流合併能・異例尽し・國諷の会・博物場B

２月24日〈五世〉〈蟻通〉・〈亮太郎〉〈正尊〉・大江又三郎主催・片山能楽堂B

３月10日〈亮太郎〉〈松山鏡〉・片山能楽堂B

３月17日〈五世〉〈鷺〉・〈亮太郎〉〈恋重荷〉・〈六世〉〈西王母〉・閑雪母堂九十歳祝いB

４月３日〈五世〉〈関寺小町〉・〈亮太郎〉〈安宅〉片山能楽堂B

５月21日〈亮太郎〉〈安宅〉・西本願寺宗祖降誕会B

５月25日〈五世〉〈鶴亀〉・〈亮太郎〉〈小袖曽我〉・橋岡雅雪喜寿祝い・博物場B

５月25日〈亮太郎〉笛方森田流紛議に亮太郎仲裁B

７月７日〈亮太郎〉〈安宅〉・播陽能楽会・姫路城内能楽場B

７月14日〈亮太郎〉〈望月〉・観世会・和田神社能舞台B

10月17日〈亮太郎〉〈天鼓〉・片山能・片山能楽堂B

10月27日〈五世〉〈唐船〉・〈亮太郎〉〈盛久〉・〈六世〉〈清経〉・〈四世〉追善能・博物場

＊十世野村又三郎出演予定が病気のため取りやめとなる。12月３日に死去の報５日付で記載B

11月10日〈亮太郎〉〈松風〉・茂山忠三郎主催・片山能楽堂B

11月24日・國諷会主催能・博物場B

12月１日〈亮太郎〉西本願寺舞台能先約あり欠席B

１月５～７日〈五世〉禁裏御能の話。B

９月21日・関西の謡曲界B。

＊「東京毎日」の評。大西親子を褒めてはいるが、婦人能を取り上げ、「大阪も又あの通りガラ〳〵騒ぐ気性の国だから」と辛辣。

12月３日・謡曲能楽界「大西家は閑雪、亮太郎の父子、是亦一方の重鎮をなせり」B

明治41年（1908）３月６日、高木半の新謡曲の話B。

＊西野春雄氏が「近代前期の新作謡曲」（『能楽研究』９号・法政大学能楽研究所）に取り上げてくださった。

３月８日〈生田耕一〉〈鉢木〉出演『観世流五番綴謡本』〔生田〕

４月６日〈五世〉〈景清〉・〈亮太郎〉〈桜川〉〈石橋〉・〈六世〉〈竹生島〉・博物場B

5月10日〈亮太郎〉〈邯鄲〉・片山晴久観世宗家相続披露・片山能楽堂B

5月17日〈亮太郎〉〈隅田川〉・観世会・神戸八王寺B

5月31日〈亮太郎〉〈芦刈〉・大阪宝生会・博物場B

6月、　〈四世〉妻逝去（91歳）A

8月28日〈五世〉を訪ふ・観世宗家より破門された生一庸の件B

11月28日〈亮太郎〉〈鞍馬天狗〉・大江能楽堂落成式B

明治42年（1909）3月14日〈亮太郎〉〈望月〉・片山能楽堂B

〈五世〉古稀祝能で〈安宅〉演能。〈七世〉子方で初舞台。曽根崎住。B

5月9日〈五世〉〈安宅〉・〈亮太郎〉〈道成寺〉・〈六世〉〈鞍馬天狗〉

＊閑雪喜寿舞納・博物場B

5月30日〈亮太郎〉〈松風〉・観世会・神戸善光寺B

10月3日〈五世〉〈張良〉・〈亮太郎〉〈石橋〉・〈六世〉〈七世〉〈橋弁慶〉B

明治43年（1910）3月20日〈五世〉〈俊寛〉・〈亮太郎〉〈邯鄲〉・観水会・神港倶楽部B

＊「亮太郎の邯鄲は定評ある得意もの、閑雪老人の俊寛は此老人の独占とも云ふべきもの」の評あれど、23日付能評に「閑雪は病気のため亮太郎が代勤」とある。

5月7日〈亮太郎〉〈安宅〉・観世清孝二十三回忌追善・東京観世舞台B

5月8日〈亮太郎〉仕舞〈笹之段〉・同上

9月4日〈亮太郎〉〈唐船〉・茂山良一（16年）披露能・博物場B

9月24日〈亮太郎〉〈江口〉・國諷会・博物場B

9月25日〈亮太郎〉〈項羽〉・同上。

＊「稀有の大会」

10月16日〈亮太郎〉〈乱〉・野口貞之追善能・博物場B

11月23・25日・12月2日付、『國諷』主催能楽・京城・一行24名B

明治44年（1911）3月26日〈亮太郎〉大江又三郎の補助で野村又三郎十一代襲名披露・博物場B

4月30日、「現代能楽の真相」覆面居士「京都観世のクリ回し、一字だけ張る節などは嫌らしく」B

＊京観世の謡い方を知るには有効な記述。

5月11日、「大西の謡は（中略）大西閑雪の謡をば一部で歓迎するが、ひどく癖のある流で」（覆面居士「現代能楽の真相」・『中外商業新報』）以下、酷評B。

5月21日〈亮太郎〉〈木曽〉・橋岡淡交舎主催・博物場B

5月21日〈亮太郎〉〈道成寺〉・西本願寺舞台B

9月20日付、「関西の珍型」（亮太郎〈小鍛冶〉を酷評）B

10月8日、國諷社主催創立五周年記念能・靖国神社B

10月17日〈亮太郎〉〈安宅〉〈安達原〉・亮太郎主催・博物場B

明治45年（1912）1月28日〈亮太郎〉〈石橋〉。生一庸復姓披露能・博物場B

2月25日〈亮太郎〉〈乱〉・名古屋能楽会・能楽倶楽部B

3月31日〈亮太郎〉〈葵上〉・『能楽時報』一周年記念・金沢佐野舞台B

5月25日〈亮太郎〉〈石橋〉・観世清廉追善能・東京牛込舞台B

大正1年（1912）10月20日〈亮太郎〉〈鳥追舟〉・大喪明・大西定期能・博物場B

11月10日〈亮太郎〉〈砧〉・観世清廉追善能・京都片山能楽堂B

11月16日〈亮太郎〉〈翁（観世清久）千歳〉〈道成寺〉・〈七世〉祝言〈金札〉・神戸大西舞台披キ・B

11月17日〈五世〉〈亮太郎〉〈翁〉〈大原御幸〉・〈六世〉〈乱〉B

11月18日付、大阪・関西の盛況、大江と大西イガミ合も円満B

11月、〈五世〉神戸湊川の大西舞台披きの2日目に〈翁〉「十二月往来」の左翁を勤めた。最期の能。右翁は〈亮太郎〉B

大正2年（1913）2月1日〈亮太郎〉〈熊野〉・井上八郎左衛門三十三回忌能・片山能楽堂B

5月11日〈亮太郎〉〈木賊〉・〈六世〉〈望月〉・〈七世〉〈大喜多信秀〉〈小袖曽我〉B

9月21日〈亮太郎〉〈清経〉・京都大江能楽堂B

10月4日〈亮太郎〉〈松風〉・観世24世元滋改名記念能・東京観世能楽堂B

10月5日〈亮太郎〉〈夜討曽我〉。同上

10月26日〈亮太郎〉〈竹生島〉〈俊寛〉・観世24世元滋改名記念能・湊川大西舞台B

11月9日〈亮太郎〉〈船弁慶〉・観世24世元滋改名記念能・片山能楽堂B

大正3年（1914）4月18・19日、東西紳士能・博物場・鮒卯B

4月30日付、大西家の常磐会謡本発行問題B

10月25日〈亮太郎〉〈融〉・茂山良一会主・博物場B

11月〈玉手菊洲〉逝去（81歳）

大正4年（1915）2月21日〈亮太郎〉〈山姥〉・伊東隆三郎主催・湊川大西舞台B

4月3日〈亮太郎〉一派・能楽大会・明石公会堂B

4月4日〈亮太郎〉〈恋重荷〉・茂山忠三郎〈花子〉披露・湊川大西舞台B

4月17・18日、大阪東西紳士能・博物場B

4月23日〈亮太郎〉舞囃子〈実盛〉・大門供養・東本願寺B

乙卯仲秋、〈五世〉川村氏に掛軸「謡曲十五徳」を与える。

＊架蔵。拙稿「大西閑雪筆『謡曲十五徳』について」（『関西大学東西学術研究所研究叢書』9号・2020年3月25日）参考。

5月30日〈亮太郎〉〈放下僧〉・名古屋田辺の会・能楽倶楽部B

10月15・16日〈亮太郎〉〈翁〉・姫路総社B

11月21日〈五世〉独吟〈老松〉・〈亮太郎〉〈高砂〉〈石橋〉・〈六世〉〈橋弁慶〉・御大典奉祝能・博物場B

大正5年（1915）2月5日、國諷社創立十周年記念能・博物場B

3月19日、三流合併紳士能・博物場B

5月9日〈亮太郎〉〈盛久〉素謡〈千手〉・梅若来阪・大西舞台B

5月13日付、大阪能楽界の紛議・大西対金剛B

5月20日付、天下茶屋服部と亮太郎の確執解消B

6月11日〈五世〉一調〈松虫〉・〈亮太郎〉〈頼政〉・博物場B

〈五世〉喜寿祝能で孫の〈信秀〉〈重一〉を相手に《唐船》のロンギ連吟。最期の舞台。〈七世〉〈翁〉披キ〈西王母〉シテ。

10月29日〈亮太郎〉〈七騎落〉・湊川大西能楽堂B

11月15日「[大阪朝日]、御大典奉祝記念能　二十一日大阪博物場舞台大西松諷社の定期能楽会の催主能、[抄記]」〈五世〉独吟〈老松〉B

12月14日〈五世〉逝去（77歳）。「大西閑雪翁　大阪能楽界の大家松風社大西閑雪氏は、本月五日、急性肺炎に罹り発熱甚だしく、大阪病院長を始め、橋本、小林等の医師治療に尽し一時は熱度下降したるが、十四日夕暮より病勢革り、午後八時、北区梅田二八六の自宅に於て遂に逝去せり。」B

〈五世〉「閑雪筆　辛棒の図」写真掲載。記憶力確か。三人の孫を一度に教える。「いろは小謡」を創作し教える。水戸中納言の前で〈清経〉。「閑雪の思い出」（観世左近『能楽随想』）、京都「三八会」主催主。A

大正6年（1917）1月23日〈亮太郎〉大阪能楽殿の構想B

3月4日、大西閑雪翁追福会、大阪市南新地明月楼。（『謡曲界』大正6年3月号）

3月5日、博物場の日程B

3月13日付、大阪・活気付く能界B

3月26日〈亮太郎〉〈田村〉・大江又三郎還暦祝能B

4月1日〈亮太郎〉〈翁〉〈道成寺〉吉田方条追善能・名古屋能楽倶楽部B

4月　〈七世〉〈亮太郎〉に朝6時から稽古を受け始める。A

同年　〈生田耕一〉山崎楽堂と『鼓筒之鑑定』出版〔生田〕

5月27日〈亮太郎〉〈加茂〉〈望月〉・茂山忠三郎古稀記念・博物場B

9月19日付、大阪・十月の能界予告〈亮太郎〉B

9月28日付、大阪・梅若能予告〈亮太郎〉B

12月9日〈亮太郎〉〈海人〉・生一左兵衛襲名能・天下茶屋服部改め生一能楽堂B

大正7年（1918）3月10日付夕刊、〈輪蔵〉は巳年に閑雪が演じて以来。B

大正8年（1919）1月24日〈亮太郎〉〈羽衣〉・大阪能楽殿披きB

1月25日〈亮太郎〉〈翁・千歳〉同上B

1月26日〈七世〉〈翁〉・〈亮太郎〉〈住吉詣〉同上B

〈亮太郎〉大阪能楽殿。1400坪当時日本一。住友家から寄付。B。

＊亮太郎の孫・手塚稔子氏が平面図や写真などを大阪歴史博物館に寄贈されたことが『朝日新聞』2011年12月28日付朝刊に掲載されている。2月14日付、大阪能楽殿舞台披キ祝賀能の報せB

4月27日〈亮太郎〉〈朝長〉大阪能楽殿B

5月10日〈亮太郎〉〈石橋〉大阪能楽殿B

10月25日〈七世〉舞囃子〈春栄〉・京都大江能楽堂改築祝B

11月26日〈亮太郎〉〈放下僧〉・大阪生一能楽堂改築披露能B

〈七世〉閑雪三回忌追善能〈江口〉B

？　〈亮太郎〉姫路総社祭　神能《松風》前日飲み明かすも精力的に舞う。一生のうちに十三箇所に舞台を作った。大正初年に湊川舞台B

同年　寺田八十二、「松諷社」幹事B

大正9年（1920）2月2日〈亮太郎〉〈鶴亀〉病気の為林喜右衛門代勤・林舞台披キB

5月13日〈亮太郎〉〈加茂〉・京都林舞台第一回B

10月8日、大西、生一各一門も出演・生一能楽堂B

大正10年（1921）1月13日、中山白峰主幹『関西能楽』創刊B

2月13日〈亮太郎〉〈七騎落〉・金剛会能B

3月27日〈亮太郎〉〈実盛〉・谷市之進追善能B

6月5日〈亮太郎〉〈恋重荷〉〈葵上〉・〈七世〉舞囃子〈田村〉・大阪能楽殿B

9月23日〈亮太郎〉〈木曽〉・観世元義追善能・大阪能楽殿B

10月16日〈亮太郎〉〈俊寛〉・京都観世能楽堂B

11月10日、能楽協会設立Ｂ

大正11年（1922）３月21日〈亮太郎〉〈邯鄲〉・能楽協会創立記念能・東京Ｂ

５月21日〈七世〉〈輪蔵〉・〈六世〉〈道成寺〉・〈亮太郎〉〈融〉・閑雪七回忌能・大阪能楽殿Ｂ

５月28日〈亮太郎〉〈海人〉・金剛能楽堂Ｂ

９月16日付、森田光風の去就、背後に大西氏Ｂ

10月８日〈亮太郎〉〈接待〉・生一能楽堂Ｂ

10月29日〈亮太郎〉〈花筐〉・〈信之〉〈邯鄲〉・名古屋能楽堂Ｂ

大正12年（1923）１月１日付、『大観世』創刊Ｂ

４月22日〈亮太郎〉〈土蜘蛛〉・林喜右衛門十三回忌・京都観世能楽堂Ｂ

５月20日〈亮太郎〉〈俊寛〉・観世清廉十三回忌能・東京観世能楽堂Ｂ

９月24～30日付、関東大震災後の消息Ｂ

10月４日付、阪神能楽師組合長に大西亮太郎Ｂ

12月15日〈亮太郎〉〈唐船〉・大阪能楽殿Ｂ

大正13年（1924）１月26日〈亮太郎〉〈高砂〉・〈七世〉〈乱〉・皇太子成婚奉祝能・大阪ホテルＢ

１月29日、〈七世〉市川由子と結婚。「結婚式」写真掲載。由子「大西家のしきたり」執筆。祖霊祭「法然院」菩提寺Ａ

３月21日〈亮太郎〉〈安宅〉〈夜討曽我〉・『大観世』創刊一周年記念・大阪能楽殿Ｂ

５月18日〈亮太郎〉〈邯鄲〉

＊手塚姓・各流合同能・大阪能楽殿Ｂ

５月29日付、大槻富太郎「文雪」と改名。亮太郎後援で能Ｂ

９月16日付、〈亮太郎〉手塚改姓祝賀能Ｂ

９月20日〈亮太郎〉〈翁〉・〈六世〉〈養老〉・大阪能楽殿Ｂ

９月21日〈亮太郎〉〈石橋〉同上Ｂ

９月23日〈亮太郎〉〈石橋〉・湊川能楽堂・同上Ｂ

10月19日〈亮太郎〉〈天鼓〉・『関西能楽』五周年記念能・大阪能楽殿Ｂ

大正14年（1925）２月１日〈六世〉〈鶴亀〉・阪神能楽組合能・大阪能楽殿Ｂ

４月１日〈亮太郎〉「当流楽師養老番付」（『大観世』）に前頭二枚目。

６月７日〈六世〉〈石橋〉・〈亮太郎〉〈葵上〉・巌名万治郎催主・大阪能楽殿Ｂ

６月14日〈亮太郎〉〈三輪〉・大江又三郎〈関寺小町〉・大江能楽堂Ｂ

11月７日〈亮太郎〉〈安宅〉・関西金春会主催・湊川能楽堂Ｂ

大正15年（1926）３月21日〈亮太郎〉〈鉢木〉・生一能・大阪生一能楽堂Ｂ

5月9日〈亮太郎〉〈海人〉・観世銕之丞追善・大阪能楽殿B

8月　〈亮太郎〉「梅若実・大西虚雪・大西閑雪追福菩提碑」建立。A

＊2018年8月に現地を訪れ、奥の院に一部破損・苔むした状態で見つけることができた。建立した手塚亮太郎の子孫稔子氏の助言により管理されている増福院の鷲峰賢昭代表から教示を得た。観世宗家の墓地に隣接するという当時の閑雪・亮太郎の存在がいかに大きかったかを示すものである。また、当時、増福院に寄贈された中村直彦作の翁面（日光写し）や大師教会での演能写真も撮影することができた。

9月26日〈七世〉〈小袖曽我〉・〈亮太郎〉〈船弁慶〉・橋岡雅雪追善能・大阪能楽殿B

〈亮太郎〉全国70社位に翁面奉納し演能。A

〈亮太郎〉高野山に「梅若実・大西虚雪・大西閑雪追福菩提碑」建立A

12月25日付、大正天皇崩御B

昭和6年（1931）7月〈六世〉〈七世〉朝鮮演能。大西信彦「外地演能の思い出」A

9月13日〈亮太郎〉逝去。A

「同志会」発足。朝日会館で学生能。A

昭和6年（1931）～9年（1934）「観世流謡曲正本」（昭和版）に黒線、〈五世〉「寸松朱入れ岩井直し本が宗家某に伝わり参照か。「岩井直恒筆形附」写真。

昭和7年（1932）3月13日、〈七世〉〈安宅〉演能。A

昭和8年（1933）5月8日、〈生田耕一〉逝去〔生田〕

6月末、神戸湊川能楽堂閉鎖〔フォ〕

昭和9年（1934）〈六世〉逝去（58歳）A

昭和10年（1935）大槻能楽堂完成。

昭和1年（1936）9月23日〈七世〉〈正尊〉演能A

同年　「天満宮奉納」写真掲載。A

昭和13年（1938）大西家弟子達の研究会として五番立て定期能始まる。（無記名「大西家ならではの催主」）

昭和14年（1939）観世左近逝去。〈七世〉思い出話A

3月21日、〈七世〉初舞台三十年記念能で観世左近に代わって〈鉢木〉A

昭和15年（1940）3月25～27日・大阪能楽殿再興慶祝能〔フォ〕

昭和17年（1842）10月〈七世〉北京・天津に演能旅行。「日本軍慰問団一行」「一文字山」写真掲載A

昭和20年（1945）6月、大阪能楽殿、空襲で灰燼。「亮太郎は一生のうちに十三箇所に舞台を作

った」A

昭和21年（1946）６月22日、梅若六郎〈隅田川〉子方〈八世〉写真掲載（星丘高良「プロの厳しさ」）A

10月11・13日、末弟信辨（ニューギニア戦死）追善能（無記名「大西家ならではの催主」）A

昭和29年（1954）７月30日、「富士登山記念」「香港旅行」写真掲載（無記名「旅行好きな先生」）。A

昭和30年（1955）２月26日、入江来布逝去・72歳（角野京子氏作成年譜による）

＊〈七世〉が来布に作詞を依頼し、〈豊崎宮〉を節付したことは拙稿「大西家所蔵番外曲〈豊崎宮〉等について」（『関西大学東西学術研究所紀要』52集（2019年４月）に紹介した。依頼時は豊崎神社友田昇宮司の先代の戦中であろう。その後、吉田叡隆氏や来布を研究している角野氏、入江緑氏にお会いし能の復元を含めて研究を進めている。

昭和33年（1958）３月、大阪能楽会館竣工。「寺田氏宅にて」記念写真掲載A

昭和34年（1959）３月20日、大阪能楽会館舞台披き。「開館式感謝状贈呈」「舞台披〈翁〉観世元正、千歳大西智久」「当日の観世大奥様と大西一家」「竹腰健造氏作　会館　翁のレリーフ」写真掲載A

昭和40年（1965）12月〈七世〉「大阪文化祭賞金賞」受賞。「五世閑雪・六世新三郎追善能会」における〈桧垣〉の演技A

昭和44年（1969）６月10日、「能舞台めぐる人々」（「日本経済新聞」）・「観世左近筆（俳句）」写真掲載A

昭和46年（1971）５月30日〈七世〉〈道成寺〉演能。大西家創立210年催主能A

昭和48年（1973）４月16日、三田市大川瀬住吉神社で能狂言奉納。以前は〈亮太郎〉が奉仕。以後、〈七世〉が10年毎に奉仕（阪口信男記）。「大川瀬能」写真掲載A

昭和49年（1974）２月21日、大阪市長公館で「第７回上方芸能人顕彰式」にて〈大西閑雪〉顕彰授賞。芸能殿堂入りA

昭和53（1978）１月〈七世〉仕舞〈高砂〉・東京観世会A

15日、〈七世〉〈鶴亀〉演能・ツル礼久・カメ孝久A

昭和54年（1979）３月21日〈七世〉〈関寺小町〉全曲演了。『初舞台七十年』（大西松諷社）出版。見返し「喜」揮毫。「名松会のこと」写真掲載（無記名）・「桧垣の岩戸山について」（無記名）・「沼艸雨能評集より」・星丘高良「あとがき」A

おわりに

年譜に入れるべきは、なお大西家蔵書の記述がある。ほとんど出来上がっているものの一点

ずつの再点検が必要である。一番気になっているのは『國諷』である。バックナンバーは法政大学能楽研究所でも全冊揃っている訳ではない。是非とも関西に置いておきたいものである。関西で必ずや揃いを持っている方がいるとは思っているのだが残念である。

突如、世界に広がったパンデミックすなわちコロナ禍は自由になった身とはいえ、襲ってきた高齢から生じる行動の制限があり東京までの訪書もままならない。こういう史資料も見逃していると御教示くだされば、ありがたいことである。

【付記】本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「大阪能楽会館蔵書解題目録の作成ならびに茂山千五郎家と青家のかかわり」（課題番号18999955研究代表者　関屋俊彦）に基づく研究成果の一部である。